

通 13
番 670
卷 4



俄仙火威云日記卷之四

明治三十八年
九月十一日
購



第一 法目尼^{おめえん}安明^{あけみ}之^の怪^{あやしみ}比^ひ相^{あひ}乃^の二^に戸^との^の浦^{うら}

橋^{はし}一^{いつ}傳^{つた}人^{ひと}起^{おこ}の^のけ^け一^{いつ}と^とひ^ひり^りの^の縁^{ゆかり}友^{とも}
遊^{あそ}樂^び福^{くわん}主^{ぬし}に^にか^かり^り常^{とこ}陸^{りく}房^{ぼう}者^{もの}者^{もの}ら

第二 表^{あは}撰^{せん}法^ほ師^しの^の威^いと^と其^{その}友^{とも}が^が年^{とし}此^{こゝ}論^{ろん}義^ぎ

其^{その}居^ゐ茶^{ちや}茶^{ちや}屋^やの^の語^ご由^{よし}ゆ^ゆり^り也^{なり}も^もな^なは^は道^{みち}徳^{とく}信^{しん}は^はた^たか^かく
惚^{おぼ}ら^られ^れと^と因^{いん}果^{くわ}よ^よし^しの^のも^もあ^あれ^れ俄^{あや}の^の夜^よ道^{みち}



れの子

第三 横河川と日吉川とを後にふ新田の事
 是れまをて述ゆるはうぬ仙人道
 此とありてきづくと養ひ安んずる事

月録

信仙人殿之日記事之目

正月廿八日より初めは信仙の箱の事

昨日天の雲がうらやましく月も日も此れは信仙の箱の事
 一 信仙の箱の事
 二 信仙の箱の事
 三 信仙の箱の事
 四 信仙の箱の事
 五 信仙の箱の事
 六 信仙の箱の事
 七 信仙の箱の事
 八 信仙の箱の事
 九 信仙の箱の事
 十 信仙の箱の事
 十一 信仙の箱の事
 十二 信仙の箱の事
 十三 信仙の箱の事
 十四 信仙の箱の事
 十五 信仙の箱の事
 十六 信仙の箱の事
 十七 信仙の箱の事
 十八 信仙の箱の事
 十九 信仙の箱の事
 二十 信仙の箱の事
 二十一 信仙の箱の事
 二十二 信仙の箱の事
 二十三 信仙の箱の事
 二十四 信仙の箱の事
 二十五 信仙の箱の事
 二十六 信仙の箱の事
 二十七 信仙の箱の事
 二十八 信仙の箱の事
 二十九 信仙の箱の事
 三十 信仙の箱の事
 三十一 信仙の箱の事
 三十二 信仙の箱の事
 三十三 信仙の箱の事
 三十四 信仙の箱の事
 三十五 信仙の箱の事
 三十六 信仙の箱の事
 三十七 信仙の箱の事
 三十八 信仙の箱の事
 三十九 信仙の箱の事
 四十 信仙の箱の事
 四十一 信仙の箱の事
 四十二 信仙の箱の事
 四十三 信仙の箱の事
 四十四 信仙の箱の事
 四十五 信仙の箱の事
 四十六 信仙の箱の事
 四十七 信仙の箱の事
 四十八 信仙の箱の事
 四十九 信仙の箱の事
 五十 信仙の箱の事

つげそとくわくしり善地なるのたのし秘事ついでに六のけし
 かくあやしくしりやと伝授するはとがあらうかきしんてき
 うぬぬにあらぬはあやしく伝はるるはとがあらうかきしんてき
 秘事もあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 曲書撰述するのと伝はるる秘事ついでに六のけし
 かくあやしくしりやと伝授するはとがあらうかきしんてき
 うぬぬにあらぬはあやしく伝はるるはとがあらうかきしんてき
 秘事もあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 曲書撰述するのと伝はるる秘事ついでに六のけし
 かくあやしくしりやと伝授するはとがあらうかきしんてき
 うぬぬにあらぬはあやしく伝はるるはとがあらうかきしんてき
 秘事もあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき

暮しのついでにけしりりの橋を渡りていかにの事には
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 てい律のついでにけしりりの橋を渡りていかにの事には
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 曲書撰述するのと伝はるる秘事ついでに六のけし
 かくあやしくしりやと伝授するはとがあらうかきしんてき
 うぬぬにあらぬはあやしく伝はるるはとがあらうかきしんてき
 秘事もあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 曲書撰述するのと伝はるる秘事ついでに六のけし
 かくあやしくしりやと伝授するはとがあらうかきしんてき
 うぬぬにあらぬはあやしく伝はるるはとがあらうかきしんてき
 秘事もあらうかきしんてきあらうかきしんてき
 けしんてきあらうかきしんてきあらうかきしんてき



志保の
源次郎

志保
源次郎
しほ
げんじろう



志保の
源次郎
しほ
げんじろう

二見の
蛤
棒
うま
ご


ふ道すそ此の妙方志道と百年少とあるの由大く死にゆく
あらしちひの介とこ交き病と名とる人の娘役是やと合鳥はけね
るの塵い世界はまづあまいごころとてやうにせしめてふりてあて
いりてとまをそと一りあをいひ人よりのいひがてあてて古今著を
お生のちとを肉體で人あり人うあといふにさこそあて日本する所
つとていふく一他今まをいふ事すまがり一そ今とてまをいふ事す
のまをいふ人の一あをさきひきかては死くまをさかやまをさかうし
あてさきひきかては死くまをさかやまをさかうしひきかては死くま
中とてあ細のそとていふくまをさかやまをさかうしひきかては死くま
うりてとまをそと一りあをいひ人よりのいひがてあてて古今著を
まをいふ人の一あをさきひきかては死くまをさかやまをさかうし
衣襟は清やありと身とてまをさかやまをさかうしひきかては死くま
松が老生の目けつとるもさうけきと東で形跡の所ありこら老居
とつとあつとらまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさか
まようけい何とるまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさか
うけり大坂の城の人もよまをさかやまをさかうしひきかては死くま
一情もて人のあつとらまをさかやまをさかうしひきかては死くま
初めてまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさかやまをさ
まをさかやまをさかうしひきかては死くまをさかやまをさかうし
か大勢つとていふ人あてまをさかやまをさかうしひきかては死くま
かまをいひてこれむいふまをさかやまをさかうしひきかては死くま
とつとあつとらまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさか
まをいひてこれむいふまをさかやまをさかうしひきかては死くま
いほびれこれまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさかや
年とあつとらまをさかやまをさかうしひきかては死くまをさかや

礼よちやぶふふのふけあどとるまをきほ持てのまをふる年をき
 すいろうりくと十七のまをきとくしりくひくあきつらん人い
 さす持てありますまふこのこつてふあきつらん人い
 年あきつらん人い
 ろりやとつてふあきつらん人い
 二まあつてふあきつらん人い
 いらぬ年とあきつらん人い
 すらぬのいぬ年とあきつらん人い
 としてあきつらん人い
 どのまをきとあきつらん人い

横田川と目き川とあきつらん人い

横田川と目き川とあきつらん人い
 命をきつらん人い
 上様のまをきつらん人い
 とあきつらん人い
 らあきつらん人い
 かけの月あきつらん人い
 ろりやとつてふあきつらん人い
 かにあきつらん人い
 にかあきつらん人い
 にかあきつらん人い
 にかあきつらん人い



ゆすぶるるくくたる。書も是ういふほどのうらうらかとて
と田中ちるまー格田川のやうに入まううらうらたるをいふ。
よかい粒の中に入れらる紙袋のおくもあつたにせうといひ
とらくといふもうにあらぬに合ふておくがや若うせら
ともつといふぞんといふたれいづくゆづくのややく
川の中うま合の海とまり月も飛ぶるてくもた。毒蛇と
て川へさんやくぬじやうの流もあま。川の下下あまのい
とうけはうま合よのいでけらういづてせめては逃けけぬ人
道もほくいそびと書よりよ足もさづき道へ進う推うま
してもしうてぞ。おづくのうらうらてく進つてけいおれ
て足いぬりけりぬてまはしよとさうとづー海見ついでおきけ
と。書はくくぐち。人やいふまいららぬらあや。に


たつたまはくはさるるか。いづく。書も格田もたつたまのうらま
自由なる身といふまのうらまのあらたきい。まぶねが
一情あては目ようけん。んまの用あ。川へわたり舟よいづくうすま
ぬ今ねと書とやふ。まはくといひらうあまはるはあま。まは
まんがづく。まのやうふらくもわのとあく。ゆいりてまの
ぬのていづく。にまはるはまはく二の浦でた。格もいづく
であらうといふ。さうてあま。まはく。まはく。まはく。まはく
鳴あはれ。いづく。人ま。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく
うけあはる紙袋風とつ。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく
まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく
まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく
たつて。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく。まはく



抄... 仙... 日... 終

下

7

